

鴨川の歴史を学ぼう

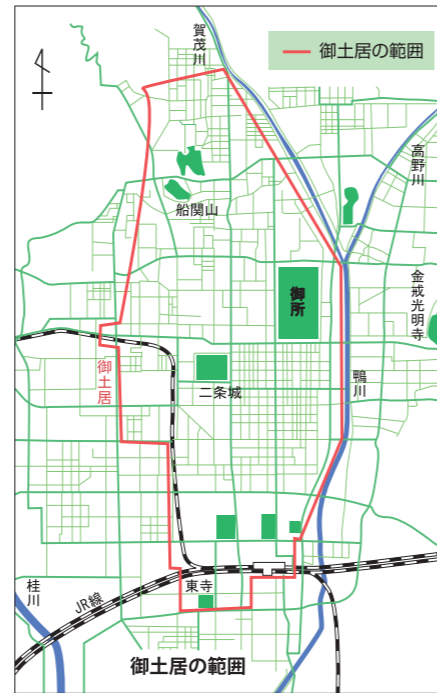
「秀吉の御土居」と「寛文新堤」

豊臣秀吉は、京都のまちに様々な改造をおこなったと言われています。天正19年

(1591年)に完成した御土居もそのひとつであり、約24kmにもおよぶ大規模な土手を作り、京都のまちの防衛や洪水にそなえました。



現在に残る御土居(北区平野鳥居前町)



寛文新堤(三条付近) 提供:国際日本文化研究センター 御土居の範囲

寛文8年(1668年)には、京都所司代板倉内膳正重矩が鴨川の川辺を整備し、河原に先斗町などの新しいまちをつくりました。このとき今出川と五条の間に築かれた鴨川沿いの石垣の護岸※1が「寛文新堤」です。



これにより鴨川の流が、今のようにほぼ直線化されたと言われています。

洪水からまちを守る 昭和の改修工事

昭和10年(1935年)、京都のまちは、鴨川のはん濫によって大きな水害に



四条大橋付近のはん濫状況 出典:昭和10年6月29日水害写真(京都府)



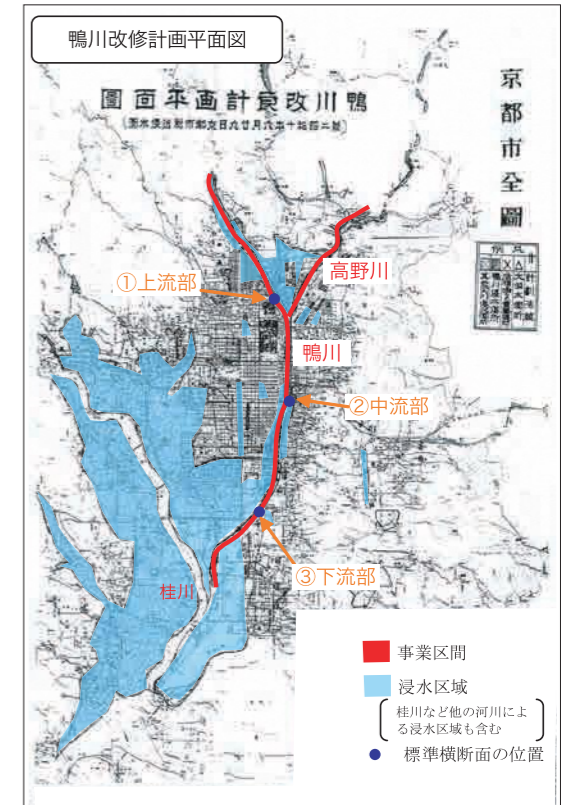
三条大橋の流出状況 出典:昭和10年6月29日水害写真(京都府)

見舞われました。この水害では、死者12名、浸水した家屋は2万4千棟以上、鴨川にかかっている橋はほとんどが流されるといった被害が発生しました。

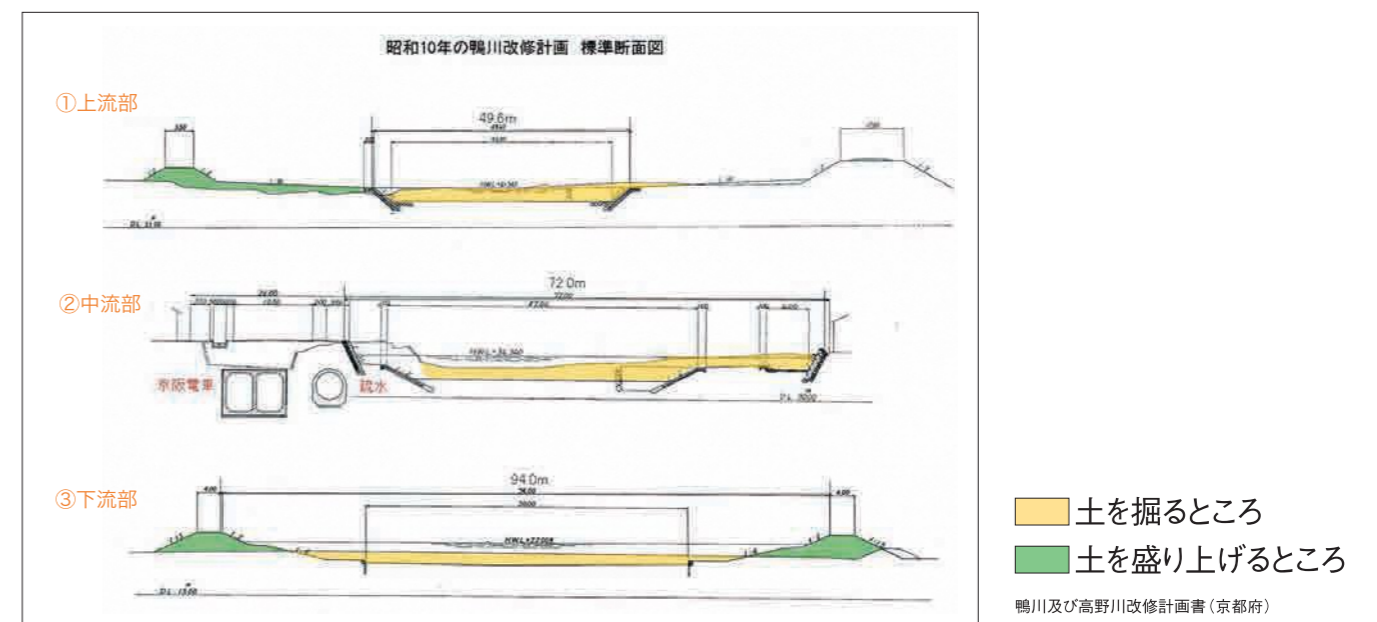
このため、京都府では昭和11年(1936年)から、洪水をあふれさせないよう川底を掘り下げ、堤防の整備をするなどの改修工事を行い、昭和22年(1947年)に完成しました。

この改修工事では、京都の風景と調和した川をつくるため、護岸に自然石を用いたり、床止工※2の段差を低くするなどのさまざまな工夫が行われました。

また、この工事では鴨川の東岸を走る京阪電車と琵琶湖疏水を地下に通す計画としていましたが、戦争の影響などにより実現することができず、三条～七条間の改修工事を行うことはできませんでした。



出典:京都未曾有の大洪水と舊都復興計画(京都府)



※1 護岸…河岸や堤防に張られた(積まれた)石やコンクリート施設。河岸が水の流れてけずられないようにするための施設。
 ※2 床止工…勾配の急な河川に段差を作ることにより流れの勢いをゆるめ、川底が掘られないようにする施設。